

# じやりみち

…被災地支援情報…

第114号 発行日 2019.3.27  
被災地 NGO 協働センター  
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10  
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702  
HP:<http://ngo-kyodo.org/>  
Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>  
E-mail:[info@ngo-kyodo.org](mailto:info@ngo-kyodo.org)  
口座番号 :01180-6-68556(郵便振替)

## 東日本大震災 8年から阪神・淡路大震災 25年へ



2019年1月17日で阪神・淡路大震災から丸24年が経ち、3月11日には東日本大震災から8年を迎えました。

阪神・淡路大震災から20年を迎えた際に、「3.11から1.17へ」というメッセージを発信しました。それは、阪神・淡路大震災を経験していない世代にとって、東日本大震災の方がより身近に感じることができ、東日本大震災で起こったことを通して、阪神・淡路大震災を見つめ直すことで、20年間の教訓や伝えなければならないことが見えてくるのではないか？と考えたからです。そして、阪神・淡路大震災から20年の宣言とアクションプランを作成しました。(裏面参照)

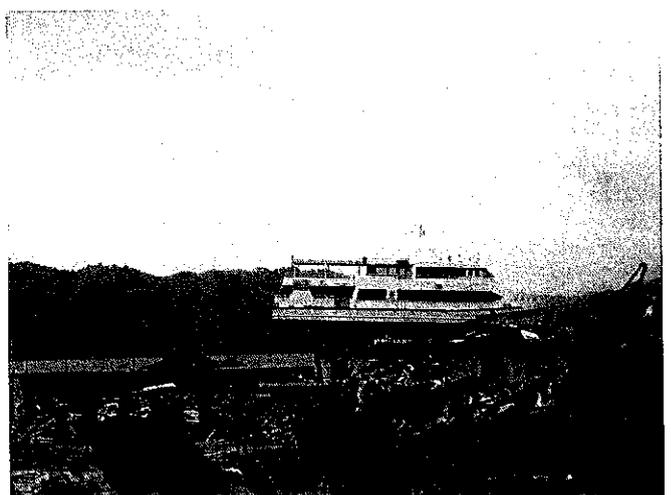
来年2020年には、宣言とアクションプランを作成してから5年を迎えますが、この5年のうちにどれくらいのアクションが実現できたかと言われると、なかなか厳しい現状があるように思います。東日本大震災の被災地では、仮設住宅でいまだに暮らす方々もたくさんおり、復興住宅でのコミュニティ形成や家賃の問題、自力再建と復興住宅に入居した方のつながりが希薄であること、高台移転や嵩上げによって作られる新たな町での暮らしづくりなど、大きな課題が山積しています。こうした問題をどうすれば解決できるのか、その解決の糸口を見つけ出すためには、改め

て東日本大震災で起きていること、あるいはその後の災害で引き起こされている課題、さらには、今の社会の中で起きている様々な課題や息苦しさについても考えながら、阪神・淡路大震災を見つめ直し、本質的な部分を問い直す必要があるのではないかと感じます。

そのためには、まず「伝える」ということを考え直す必要があるのではないかと思います。結局、阪神・淡路大震災からの教訓が伝わっていない、そのほかの被災地の経験が活かされていない、という話になってしまいます。では、「伝える」とは一体どういうことなのか？ということについては、十分に議論を尽くしてきたのでしょうか？阪神・淡路大震災から25年に向けて、何を議論していくのか？と考えた時に、もう一度、「伝える」も含めて、一つ一つのキーワードを丁寧に探り出し、その意味をもう一度問い直すことが必要ではないでしょうか。

こうした議論を、普段災害に関心を持っていない人たちや若い大学生、高校生たちがどのように受け止めるのか、ということを経験しながら、積み重ねていくことで、「伝わっていく」のではないかと思います。東日本大震災から8年、そして阪神・淡路大震災から25年へ、多くの方と共に議論をしていきたいと思えます。

(代表：頼政良太)



# 阪神・淡路大震災から20年 KOBE市民とNGOフォーラム2015 10のアクションプラン

阪神・淡路大震災から20年 KOBE市民とNGOフォーラム2015に集まった人々との議論を元に宣言文を作り上げました。その宣言文を元に、これからの社会を担う若い世代を中心として、今後どうやって生きて行くのかを考えました。そのアクションプランを以下に示します。

## 一、いのちを大切にしよう

どんなときでもいのちを大切にすることが大前提。自分のいのちだけでなく、まわりのいのちも大切にしよう。

## 一、気軽にボランティアをしてみよう

何もできないかもしれないけど、何かできるかもしれないと思って続けたら、何でもできることに気づく。

## 一、できることは自分で、できないことは一緒に

個を尊重し、自分と向き合い、人とつながろう。

## 一、考えてつながろう、自然ともつながろう

一方的なつながりにならず、常に相手を想い、つながろう。人と人とのつながりだけでなく、自然ともつながろう。

## 一、声なき声を聴こう

一人ひとりに寄り添って声を聴こう。すべての人に目配り・気配り・心配りをしよう。

## 一、見えないモノ、見えないコトを考えよう

想像力を働かせて、目の前の人の問題を社会全体に拡げて考えよう。

## 一、時には“アホ”になってみよう

型にとらわれず、そこそこ自由な発想で行動しよう。そして、相手の意見を尊重し、先入観にとらわれないように聞こう。

## 一、まずは一歩を踏み出して、小さな実践を重ねよう

頭でっかちに考えるのではなく、一歩踏み出して体験してみよう。自分にとっての身近な実践を積み重ねよう。

## 一、「覚悟」を持って生きよう

一歩を踏み出すための勇気を持つよう。

## 一、「いま」を大切に生きよう

過去、現在、未来のつながりを想像しよう。



寺子屋

2018年度寺子屋

シリーズ「ボランティア2年目はあるのか？」を終えて

2018年度の寺子屋は「ボランティア2年目はあるのか？」というテーマで1年間実施してまいりました。合計5回、計7名の講師の方々による、様々な角度からの議論を行なってまいりました。1月15日には、最終のまとめの会として、兵庫県立大学減災復興政策研究科講師の宮本さん、神戸学院大学の学生である池内さん、そして当センターの顧問である村井の3者による鼎談形式の会が開催されました。今回は、この最終回の議論を振り返りながら寺子屋の内容をまとめてみたいと思います。

まずは顧問の村井から、これまでの寺子屋での議論やボランティアのルーツについての発表があり、その後、池内さんと宮本さんのお二方から発表がありました。池内さんからはボランティア活動に参加していく中で、なかなか周りの人へ伝わらない、という部分や、当初ボランティアに参加し始めた時には、瓦礫撤去のような活動がメインだと思っていたが、そうではないところにもボランティアの可能性がある、ということに気がついたお話などをいただきました。宮本さんからは、阪神・淡路大震災がボランティア元年と言われた意味をもう一度考え直す、ということで、全く見ず知らずの他人同士の助け合いが大きく花開いたのが阪神・淡路大震災ではないか？他人同士の助け合いによって、数多くの被災者が助けられたという非常にポジティブな結果を生んだと言えます。一方で、同じ年のオウム真理教による地下鉄サリン事件に見られるような、他人は何をするのかわからない(犯罪的な行為をする可能性が高いと感じる)存在としても認識されていて、他者同士のコミュニケーションのプラスのベクトルとマイナスのベクトルの2つの方向があるのではないか、というようなお話もいただきました。

こうして会場の議論とも合わせて考えて見ると、ボランティアをめぐる環境を次のように捉えることができるのではないのでしょうか？見ず知らずの方々の手助けがなければ、被災地の復興は達成されません。しかし、見ず知らずの他人が大量に押し寄せてくることは、何をするかかわらない人が地域に入ってくることにもなるという意識が働くため、大変恐怖感が強い。そこで、災害ボランティアセン

ターを作り、管理をすることでその恐怖をなくしていこうとしてきたのではないかと思います。しかし、管理を進める中で、ボランティアの創造力や多様性が損なわれてきているのも事実ではないかと思います。

ボランティア2年目は、前述した2つのベクトルのうち、見ず知らずの他者同士による助け合いによるプラスのベクトルに注目をしていくことから実現していくのではないかと思います。当時から当センターではボランティアは「なんでもありや！」と掲げ、ボランティアの多様な支援活動こそが必要だと訴えてきました。阪神・淡路大震災から10年の活動を記録した「ボランティアが社会を変える 支え合いの実践知」(Kansai 看護出版,2006)の中で『ボランティアが対象者と一つになった時に、<ふれあい>が生まれる、というこのレベルで「なんでもありや！」は成立する。被災者と触れ合っている支援者には既存の規則(ルール)はいらない。むしろ支援活動は、ボランティア活動をマニュアル化し、パターンにはめてしまう規則から自由でなくてはならない、という考え方である。』とされています。まさに、このボランティアと被災者の<ふれあい>による化学反応とそれを起こすための土壌としての「なんでもありや！」を作り出していくことが「ボランティアが社会を変える」ことにつながるのでしょうか。他者同士による助け合いによって被災者がポジティブに変化していくこと、そして、それはボランティアと被災者の<ふれあい>から生まれていくこと。<ふれあい>はボランティアによる自由で創造的な、多様な活動が行われてこそ、生まれていくということから、ボランティア2年目の扉が開いていくのではないのでしょうか。阪神・淡路大震災からあと1年で四半世紀を迎えます。このボランティア2年目の扉を開き、ますます自由なボランティア活動が活発になることが、被災地の復興を促進するとともに、一人ひとりを尊重した社会を生み出す原動力になるのではないのでしょうか。

(頼政 良太)



## 被災地 NGO 協働センターの被災地支援活動

### ◆熊本県阿蘇郡西原村での支援

熊本地震で被災を受けた西原村での支援活動を継続しています。西原村 reborn ネットワークを通じ、集落再生のための支援活動などを行なっています。2月には第2回西原村大座談会が開催されました。子育て世代、障害者、移住者、小さな集落などのテーマに沿って、様々な立場の被災者から声を集めて発表を行いました。一人ひとりの災害の捉え方が違うように、復興のあり方も人それぞれなのではないかと感じます。今後も一人一人に目を向けた被災者支援を続けていきたいと思っています。

### ◆大分県日田市での支援活動

大分県日田市では、当センターも立ち上げに関わったひちくボランティアセンターによるみなし仮設住宅の支援が継続して行われてまいりましたが、この度、新たな法人を立ち上げ、みなし仮設住宅の支援を引き継ぎながら、他の被災地への支援活動も行なっていくということになりました。当センターは、新たに立ち上がる NPO 法人リエラの団体会員として、引き続き大分県日田市の被災地支援に間接的に関わって参ります。また、代表の頼政は NPO 法人リエラの理事として関わりを続けてまいります。

日田市では、みなし仮設住宅にお住まいの方々が未だ 30 世帯以上いらっしゃいます。多くの方々はその後の再建についての道筋について、決断を下す時期に差し掛かっています。みなし仮設住宅にお住まいの方にお話を聞くと、「前のところはやっぱり怖い」「住宅の再建について同じような被害を受けた人たち同士で話せたのがよかった」「新しい地域に行ったことで交流がなくなり、元気がなくなりました」というお話をさせていただきました。引き続き、

みなし仮設住宅の支援を行うとともに、公営住宅の建設計画についても進められており、今後は新たな居住地での継続的な支援が必要になっています。今後も NPO 法人リエラを通じて当センターも微力ながら少しでも関わりを持っていきたいと思っています。

### ◆西日本豪雨—広島県安芸郡坂町での支援活動

西日本豪雨で大きな被害を受けた坂町での支援を、兵庫県立大学減災復興政策研究科の学生たちとも連携しながら継続しています。仮設住宅からは少しずつリフォームが終わり、転居される方も出てきました。一方で、仮設住宅の自治会が形成されていないため、不安を感じている方もいらっしゃいます。みなし仮設住宅の方々への支援もなかなか届いていないのが現状です。

3月10日には、兵庫県丹波市の復興推進室や地域住民の方々をお招きし、復興塾という勉強会を開催いたしました。当日は、約40名の方に参加していただき、様々な意見交換を行いました。「地域の問題はたくさんあり、どれから手をつけていいか優先順位がわからない」「100世帯もあるので、なかなか意見をまとめられない」「仮設住宅の自治会を作るにはどうしたらいいのか」など多くの質問が出ました。こうした勉強会が、地域での復興へ向けた取り組みが少しでも参考になればと開催をしましたが、次回開催への要望も出るなど、住民のみなさんの積極的な姿が印象的でした。引き続き、坂町での支援も継続して参りたいと思います。

**\*西日本豪雨災害・岡山県倉敷市真備町での取り組みは、第7面を参照**

**\*東日本大震災での取り組みは、第8面を参照**

▼3月10日開催の復興塾の様子



被災地の現場から

# あの日から8年・・・

東日本大震災の発生からやっと8年が経過しました。今年の3月11日は、低気圧のせいで朝から大雨と暴風で嵐のような一日となりました、「あの時、津波に流され、もうだめかと思った。あの時のことは忘れられない。これは体験した人じゃないとわからないでしょう。それが切ない・・・。」とかなしそうに語ってくれました。

現在、「東日本大震災で岩手、宮城、福島3県に建設され、残っている応急仮設住宅の団地209か所のうち、約半数で入居者が5戸以下になっていることが、各地自体への取材で分かった。」「3県には1月末現在、仮設住宅団地が209か所にあり、1756戸に3418人の入居者がいる」と伝えられ、支援者の減少により、取り残されている人に対する心のケアなどの支援の継続を求める声があがっています。

避難所から仮設、そして復興住宅と単線型の復興施策が主になっていますが、これでは被災者に負担が大きいということで、避難所から恒久住宅など、なるべくコミュニティを壊さず、被災者に負担が少ない支援の形が提言されています。阪神・淡路大震災を経験した被災地で活動をしている阪神共同福祉会の中村大蔵理事長は「生活に『仮』はない。一人一人を尊重しながら、足りない部分は補い合う暮らしができるよう、初めからグループハウスを作るべきだ」と提言しています。

これまでの被災地ない長期化する避難生活で、被災者の負担は大きくなるばかりです。特に原発事故のあった福島県では未だに帰還の見通しも立たない状況も少なくありません。



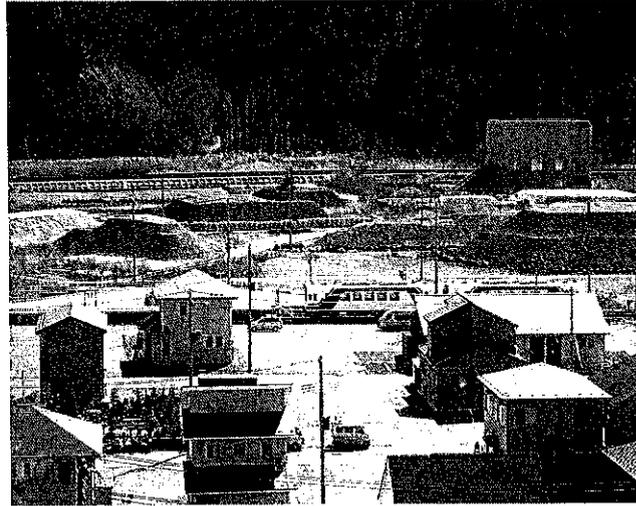
▲陸前高田市のモビリア仮設

仮設に住まけないぞうの作り手さんも残すところあと一人になりました。やはり土地の造成が遅れたことにより8年の歳月を仮設で生活し、その上、集約を迫られ仮設から仮設への引っ越しもしました。その他にも被災者の中

▼ 2011年大槌町津波



▼ 2019年大槌町



には、避難所を3か所も変わり、仮設も3か所も変わり、とても辛かったということを知りました。繰り返される被災地での過ち・・・なぜいつも同じ過ちが繰り返されるのか、いつになったら被災者は安心・安全に避難ができて、復興を歩んでいけるのでしょうか？

まけないぞうの作り手さんが、いつに無く熱弁をふるってくれました。「避難訓練や研修などしているけど、参加するのは肩書のある人ばかり、それが末端まで伝わってこない。実際に津波の時も、その人たちはいないし、何もかも流され、自分たちで工夫してやった。もっと末端のみんなにも伝わる方法を考えてほしい」と・・・。「防災訓練で、AさんがBさんを助けるとか担当制にしていたけれど、平日だと仕事に行っている人は、助けることはできないし、リヤカーで押して逃げたりする訓練もしているけど、実際はそんなことはできないと思う。今回のように津波が来るまで時間がある場合もあれば、そうでない時もある。山に逃げて助かった子どもたちもいるけれど、年寄りやそんな山に駆け上がるなんてできない」など、経験者でなければ語れない体験がたくさんあります。しかも一人ひとりまったく違った体験をしているので、あらためてじっくり話を聞く必要があると感じました。

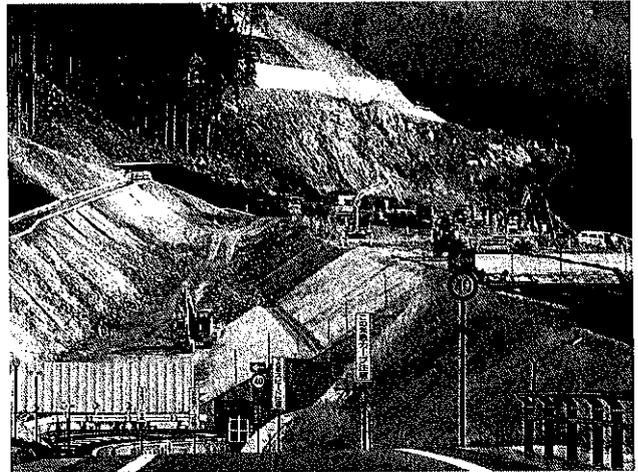
また、再建を果たしても被災地では淋しさを抱える人は少なくありません。数十件ある高台移転をしたまけないぞうの作り手さんも、「昼間家にいても誰にも会わないよ～」と言います。引っ越してから約1年ほど、環境の変化からか、うつっぽくなって調子が悪いと訴えていました。「仮設のほうがよかった」と言います。これは神戸の震災の後にも聞いた話です。最近になってやっと具合がよくなってきたようです。

災害復興住宅でも、孤立死が急増しています。私が聞いた話の中でも、以前に復興住宅が完成して半年もたたずに、孤立死や自殺など10人もの人たちが亡くなったと知りました。せっかく終の棲家として入居した人たちがこんなにもあっけなく亡くなってしまおうのか。。。頭を鈍器で殴られたような衝撃でした。一体いままで何をしていたんだろうか。。。せっかくあの津波で生き残った尊い命が奪われていくなんで。。。

▼復興住宅



海には海が見えないほどの高さの防潮堤、山には山を切り崩し作った復興道路、まるでコンクリートジャングルです。自然豊かな三陸の海が、山が破壊されているのです。海の潮の流れが変わり、とれるはずの海の幸がとれなくなったり、鹿が人間の生活圏に押し寄せています。今まではこんなじゃなかったのに。。。と悲痛な声が聞こえてきます。



▲切り崩した山々

これが住民が求めていた「復興」なののでしょうか？道路ができて便利になった、その反面ストロー現象という、通過する町が出てしまいこれまでに立ち寄っていた地元の道の駅などが大打撃を受けています。

人間はどこまで貪欲なののでしょうか？自然に抗うことはできないと、8年前の津波は私たちに教えてくれたのに・・・。  
(増島 智子)



▲開通した三陸道

# コープこうべの取り組み

## ～平成30年7月豪雨災害ボランティア～

昨年7月に発生した豪雨災害に対してコープこうべでは緊急募金を実施したところ、8,200万以上の大きな金額が寄せられました。通常であれば日本生活協同組合連合会に全ての額を預け、各被災地に義援金、支援金として配分されるのですが、今回は組合員の善意の募金をより有効に、また支援の内容をより明確にするため、募金の一部をコープこうべで確保し、独自の被災地支援を実施していくことになりました。

そこで被災地 NGO 協働センター様に相談したところ、協働でボランティアバスを出していくことになりました。

第1回目の派遣は昨年12/22(土)に決定し、コープこうべからは役員(組合員理事1名を含む)9名と被災地 NGO 協働センターからは事務局1名を含む5名の合計14名が参加し、岡山県倉敷市真備町に向かいました。

今回のボランティアに関しては、昨年11月に豪雨災害からの復興を後押ししようと、倉敷市真備町地区の福祉・医療関係者が一緒になって、被災者の送迎支援や電話相談の取り組み「お互いさまセンターまび」を開設された、NPO法人「岡山マインドこころ」の代表理事の多田さんに、活動場所などのコーディネートをして頂きました。

当日のボランティア活動は同法人の精神障がい者の社会復帰を促すための就労施設で、男性は脚立に上り、天井ボードを止めていた針やネジの撤去作業、女性は2階の床、また柱廻りなどを雑巾で拭き掃除を実施しました。

午後からは、午前中に引き続き、作業所で活動を行う班と、鉄道高架橋近くのプラスチック、陶器ごみ等を回収する2班に分かれて活動を行いました。

この辺りの清掃は地域住民も実施できていないとのことで、最終的には土嚢袋約20袋分のごみが回収され、非



▲天井ボードの針やネジの撤去作業



▲最終的には土嚢袋約20袋分のごみを回収作業

常にきれいになり、全ての活動を15時で終了しました。

2回目のボランティア活動は、年明け2/11(月・祝)に実施しました。当日は雪が舞う非常に寒い日でしたが、コープこうべからは4月入所予定の内定者2名、また入所してから3か月しか経っていない契約社員1名を含む7名と被災地 NGO 協働センターからは2名の合計9名で、岡山県倉敷市真備町に向かいました。

今回の活動場所は、前回と同じくNPO法人「岡山マインドこころ」代表理事の多田さんにコーディネートしていただき、7月の豪雨災害以降、人は住んでおらず、ほとんど手が入っていないハイツの1室で、ハイツ裏にある幼稚園のママ友などに部屋を開放し、居場所として提供できればというオーナーさんの意向で、泥だし・清掃のボランティアを依頼されたとのことでした。

部屋に入ってみると泥まみれのひどい状態であり、同時に災害からかなりの日数が経っていることから、床にこびり付いていました。

参加者は箒で泥をかき出した後、雑巾で水拭きを行いました。当日は非常に寒く、水仕事は大変つらい作業でしたが、15時まで一生懸命、作業を行いました。



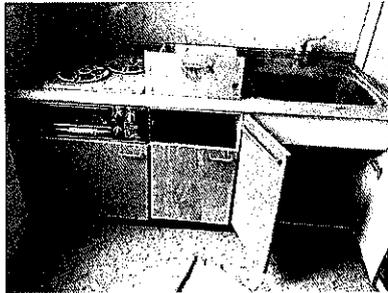
▲作業所2階の床掃除



▲鉄道高架橋近くのごみを回収しました(写真上・下)

2回のボランティアを通して感じたことは、災害からかなりの月日経っているため、徐々にでも復興は進んでいるのかと思っていましたが、個人宅では当時のまま放置されているところも多く、継続的な支援が必要であると感じました。今後もボランティアバスの派遣は実施していく予定ですが、仮設住宅でのサロン、また足湯ボランティアなど、高齢、また女性の組合員でも参加できるような活動も検討していきます。

(コープこうべ 八木 一)



▲▼泥が床全面を覆い、しかも乾いてこびり付いていました



▲▼埃の舞う中、ほうきで泥を掃きました



▲▼水拭きはかなりつらい作業でした



### ■入会・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によりしくお願い致します。

★団体会員	年会費¥10,000	×	1口以上
★個人会員	年会費¥3,000	×	1口以上
☆団体賛助会員	年会費¥10,000	×	1口以上
☆個人賛助会員	年会費¥3,000	×	1口以上
☆自由選択会員	年会費¥		任意の額

■郵便振替 加入者名：被災地 NGO 協働センター  
口座番号：01180-6-68556

■ゆうちょ銀行

支店番号：一一九（イチイチキュウ）支店/店番：119  
当座 0068556 / 受取人名：ヒサイチ NGO キョウドウセンター

■クレジットカードでのご寄付

クレジットカードでも会費やご寄付をしていただくことができます。右のQRコードからお願いします。当座 0068556 / 受取人名：ヒサイチ NGO キョウドウセンター

■クレジットカードでのご寄付

クレジットカードでも会費やご寄付をしていただくことができます。右のQRコードからお願いします。



### ■編集後記

3月10日～13日まで、岩手県へ訪れました。震災から8年の3月11日、被災されたシェフの復興住宅で1日だけのお店がオープンしました。お客は4名。8年間一緒に歩んできた仲間が「いま」ここにいて、思い出を語ります。ひと手間、ふた手間かけられたシェフの思いの詰まった料理に涙が止まりませんでした。「寄り添うことってこういうことなんや」。東北の風景は、重機やダンプが走り崩される山々。「私たちが残したい風景は何なのか」。心の中で感じる東北の風が、とても冷たく感じました。(ボランティアスタッフ 柚原)

# CODE

当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしく申し上げます。

第63号

2019.3.27



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10  
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/

# ぞう通信。

東日本大震災から8年の月日が流れました。8年という月日の長さを痛感させられました。小学生ならゆうに小学校を卒業してしまうくらいの時間が流れているのです。こんなに長くなるとはというため息交じりの言葉が聞こえてきます。

3月11日が近づくと報道は津波一色になります。「テレビを見ていても津波のことだらけで、頭が痛くなってしまった」という作り手さん。まけないぞうは8年間の間被災者に寄り添い続けてきました。「まけないぞうが心の支え」と話してくれる人、「ぞうさんいないと淋しいの」、「津波のあと、家の片づけをされていて腱鞘炎になり、避難所で休んでいたところにぞうさんが来たの。それからの付き合いだものね。ぞうさんはできあがったらかわいいし」と話してくれました。

まけないぞうの作り手さんも仮設生活をしている人は残すところあと一人になりました。延びに延びた土地の引き渡しはやっと済んだのですが、大工さんの都合で自宅の再建はお盆を過ぎるようです。本来、お盆の前にできたらと願っていたのですが、残念ながらそれはかないませんでした。「いいんだ、ここまで待ったんだから、ちゃんとできるまで待つよ!」と諦め半分の言葉が聞こえてきます。

この作り手さんはまけないぞうの手間賃をずっと手を付けずに貯めています。「もう30万円以上貯まったよ!まけないぞうで貯めたお金で新築の自宅に何か記念になるものを買うんだ」とうれしそうに話してくれます。

この3月は遠野のつるしびなのお祭りがあります。津波の直後に出会った「ふきのとうの会」のみなさんが2011年は毎日交代で避難所を回ってくれました。年配の女性では瓦礫の撤去もできないし、なかなか沿岸被災地でのお手伝いは難しいとのことでした。でも、手芸の得意なみなさんならではの手仕事を生かしてまけないぞうづくりの先生になってくれたのです。避難所が閉鎖されるときに、「私たちのボランティアももう終わりにしようかな」と相談を受けました。「仮設に入ってから、孤立死の防止やコミュニティづくりなどが大変なので、ぜひ続けてほしい」とお願いしました。そして、仮設への入居が進んで落ち着いた頃に、「今度はつるしびなを被災者のみなさんに教えよう」と提案を受けました。もちろん大賛成で、継続して被災者を支えてくださることは、何より被災者の励みになります。そして、復興住宅に移った今でも、3か所の集会所を月に一度ずつ回ってつるしびなを教え続けています。代表の菊池加代子さんは「もう被災者と支援者ではなく友だちです」と話しています。毎年3月のこの時期に遠野で作品展を開催し、被災地から被災者の人たちを呼んで交流を続けているのです。そして、今度はその被災者の人たちが、リーダーとなって、復興住宅で手芸サークルを作って作品を生み出しています。支えられる側から支える側へ・・・被災者の人たちが「先生、先生」と呼ばれている姿をみて、胸



▲まけないぞうの作り手さん最年長93歳

が熱くなりました。仮設ができた当初、集会所もなくテントと長机と椅子を持ち込んでまけないぞうを作った日思い出します。「手芸もしたことなかったのに、あの時、まけないぞうを教えてもらわなかったら、こんなになってないよ!」と言ってくれました。まけないぞう冥利に尽きませぬ。



▲遠野での交流会

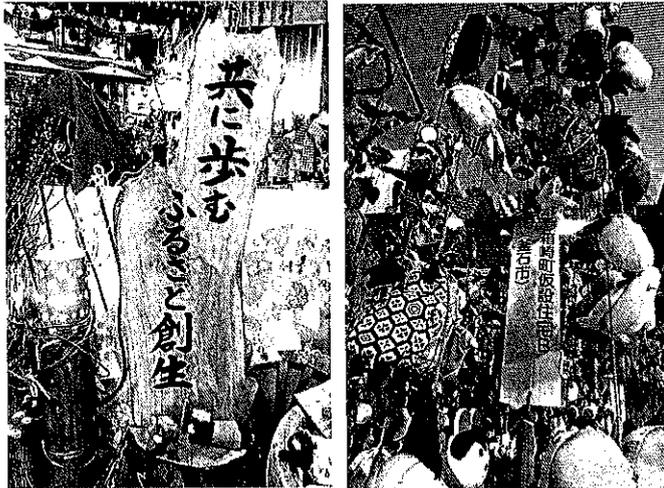
また、大船渡の高台移転をしたまけないぞうグループの人たちは、メンバーの人が建てた小屋に集まっていました。久しぶりの顔合わせにみなさんうれしそうでした。小屋の中は、木の柱がふんだんに使われていました。すると「これ、仮設よ!!住田町の木造仮設よ!!」と。なんと、住田町の画期的な取り組みとして注目されていた木造仮設を3万円ですぐに払い下げたものでした。しかも、一般住民でも法人でもその払下げに応募できる仕組みでした。その作り手さんは抽選に当たって手に入れたのです。移送費に約20万円、設置費に300万円かかったそうです。でも、新しい高台の区画には集会所がまだないので、みなさん集まれる場所ができてとてもうれしそうです。参加者は光熱費として100



▲まけないぞうも飾ってくれています



▲手作りの集会所



▲今年のつるしびなのテーマ

▲沿岸のみなさんの作品

円を支払うことをみなさんで決めたそうです。とても理想的な集会所だだと思います。こうして集まる場があればみなさん気兼ねなく集まって大好きな手芸もできてストレスも発散できます。「今日来てよかったわ」「まけないぞうのお陰だ」「普段一人だと何もやることもないからね」など笑顔に花が咲きました。

正直なところ8年も経つと、体調を崩して施設に入った方、再建をして1年も経たないで亡くなる方、病気をした方など高齢になればなるほど1年1年やっとの思いで暮らしています。若い人たちとは時間の流れが違うのです。私も岩手に訪問するたびに実感します。いつ何があるかわからない漠然として恐怖感があるのです。



▲住田の木造仮設

それでも、まけないぞうが被災者に寄り添い、友達の輪を広げたり、心の支えとなっていることを実感しながら、私もがんばれます。こうして、被災者の人たちを8年経っても支えているまけないぞうに私も感謝します。それもまけないぞうを支えて下さっている支援者のみなさまのお陰です。ここであらためてお礼を申し上げます。ありがとうございます。まけないぞうはこれからも被災者の方々に寄り添っていきます。どうぞ今後も末永くまけないぞうを支えてください。よろしくをお願いします。

(増島 智子)



▲まけないぞう

まけないぞうの作り手さんからのメッセージです。

「一つ一つ心を込めて作ったぞうさんが、今どこにいるのかなと、思いながらいつもぞうさんを作っています。私もぞうさんに元気をもらっています。」

(岩手県大船渡市)

「まけないぞうさんに会って6年余りになります。あの震災から8年も過ぎ、その後も世界中のどこかでさまざまな自然災害が発生しています。その度にあの災害時にみなさんから支援して頂いたありがたさが身に染みていて、今の私に何が出来るか考えさせられました。やはり皆さんに笑顔を届けられるまけないぞうさんです。これからも続けたいと思いますのでよろしくをお願いします。」

(岩手県釜石市在住)